

IBMのハッカソンへの取り組み

■ ハッカソン・ブーム

ハッカソン (Hackathon) という言葉を聞いたことがありますか？ハッカソンは、高い技術をもってハードウェアやプログラムを構築・改造することを表すハック「Hack」と、マラソン「Marathon」を組み合わせた造語で、エンジニアやデザイナーがチームを作り、特定のテーマに対して短期間(24時間～1週間)で独創性・新規性のあるアプリケーションやサービスを開発し、その成果を競う開発イベントのことです(図1)。

ハッカソンは1999年頃に米国のIT業界で最初に開催されたとされています。その後、GoogleやFacebookといった新興IT企業が主催し大きな成果を上げ、広く認知されるようになりました。Facebook社の「いいね」ボタンが同社主催のハッカソンから生まれたことをご存

じの方も多いことでしょう。

日本でも、楽天やヤフーといったIT企業や技術コミュニティが中心となって開催されてきましたが、近年、IT業界以外の企業や自治体が開催する例が急激に増えています。2015年1月にはトヨタ自動車が「未来のクルマ」をテーマにIoTハッカソンを開催し、5月にはABC朝日放送が「ABC Hackathon」と題したモノづくりハッカソンを開催し、当日の様子をドキュメンタリー番組として放送しました。他にも大小さまざまなハッカソンが全国各地で毎週のように行われており、2014年以降はハッカソン・ブームと言われるほどの人気イベントとなっています。

■ ブームの背景

なぜ、今これほどまでにハッカソンが流行しているのでしょうか？一つの理由は、「誰もが短期間で、

イノベティブなプロダクトを作成可能な、技術的な土台が整ってきたこと」にあります。従来のアプリケーション開発では、開発を始める前に開発環境の準備といったインフラを構築する必要があり、短期間のイベントでアイデアを形にするには、インフラ構築とアプリケーション開発の双方に対する高い技術が要求されました。そのためハッカソンには、「限られたスーパーエンジニアが腕を競い合う場」というイメージがあり、参加の敷居が高いと考えるエンジニアが多い状況でした。

しかし、「SoftLayer」や「IBM Bluemix」(以下、Bluemix)に代表されるIaaS/PaaSの登場により、この状況が一変しました。これらのサービスでは、必要なインフラやOS・ミドルウェアの準備をわずか30秒から数分で完了させることができます。そのため、インフラの知識のないエン

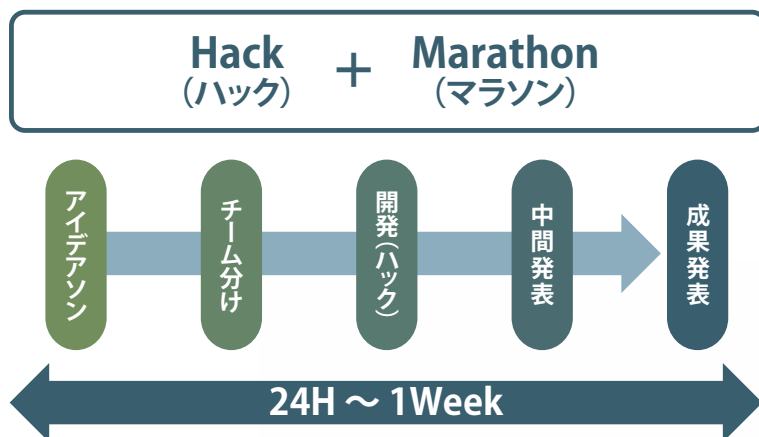


図1. ハッカソンの流れ

エンジニアでも、アプリケーション開発に集中でき、短期間でアイデアを形にできるようになったのです。この「インフラからの解放」がハッカソンへの参加の敷居を下げ、結果として参加者のすそ野が一気に広がりました。Bluemixを活用したハッカソンを見ていると、さらに一歩進んで、ほとんど開発経験のない非エンジニアの方でも開発に加わることができる実感で、今後ますます参加者や開催例が増えていくと思われます。

ハッカソンがブームになっているもう一つの理由は、「ハッカソンの価値が企業や自治体に認知されてきたこと」だと考えています。グローバル化により競争が激化し、自社の製品・サービスがコモディティー化するスピードが速くなってきており、どの企業も新しい製品・サービスを次々と市場に投入する必要に迫られています。このような市場環境の中、自社のみで新規事業・製品・サービスを短期間で生み出すことに限界を感じ、ハッカソンを通じたオープン・イノベーションに期待を寄せているのです。自治体も同様で、市民による市民目線での課題解決策や、オープンデータを活用した新しい行政サービスを生み出すきっかけとして、ハッカソンに注目し始めています。

■ IBMのハッカソンへの取り組み

ハッカソンを主催者という観点から分類すると、「自治体」「団体・コミュニティ」「大学・研究機関」「企業」の4つに分けられます(図2)。

当然、主催者によってハッカソンを実施する目的は異なります。「自治体」は地域課題の解決やオープンデータ

の活用促進、「団体・コミュニティ」は課題解決や特定の技術の利用者拡大、「大学・研究機関」は研究成果の活用案や教育が主な目的です。そして、「企業」の目的は、前述の「新規事業案の創出」に、「自社製品のマーケティング」「イノベーション人材の育成」を加えた3つと言えるでしょう。

「自社製品のマーケティング」の例として、IBMのハッカソンへの取り組みをご紹介します。前述のように、SoftLayerやBluemixはインフラ構築やミドルウェア導入といったスキルや時間を要する作業からエンジニアを解放することで、アプリケーション開発にかかる時間を劇的に短縮するクラウド・サービスです。ユーザー数を伸ばすカギは、いかに多くのエンジニアに知ってもらい、体験してもらい、そして感動してもらうかという点にあります。知ってもらうだけでは不十分であり、エンジニアの方々自身でSoftLayerやBluemixが提案する、新しい開発スタイルに感動してもらうことが重要です。

また、アプリケーション開発のプラットフォームという性格上、ユー

ザー数増加はさらなるユーザー数増加に拍車をかけることが期待されます。SoftLayerやBluemixを中心としてユーザー同士や企業がつながり、そのつながりから新たなビジネスや価値が生まれる。そしてそのつながり自体が価値となり、さらに多くのユーザーが集まる。そのようなエコシステムを構築することが、クラウド・サービスの成功のカギと言えます。

ハッカソンは、SoftLayerやBluemixを体験し、感動してもらい、ファンになってもらうのに最適なイベントです。また、ハッカソンを通して苦楽を共にすることで、ユーザー同士の深いつながりが生まれ、このつながりがエコシステムを構築・拡大していきます。このようにハッカソンは、SoftLayerやBluemixのマーケティングに最適なイベントであり、IBMは多くのハッカソンに協賛しています。今年3月～4月にNASA主催で開催された世界最大&世界同時ハッカソンである「International Space Apps Challenge」や、5月に開催されたABC朝日放送主催の「ABC Hackathon」、そしてリクルート主催の日本最大のハッカソン

主催者	目的
自治体	地域課題の解決 オープンデータの活用促進
団体・コミュニティ	課題解決 特定の技術の利用者拡大
大学・研究機関	研究成果の活用案 教育
企業	新規事業案の創出 自社製品のマーケティング イノベーション人材の育成

図2. ハッカソンの主催者と目的

「Mashup Awards」などの大規模なイベントから、比較的小規模のイベントまで幅広く協賛しています。

結果として、SoftLayer、Bluemixは、市場認知度が急速に上がるとともに、ユーザー数が急増してきています。このことから、ハッカソンへの取り組みが着実に成果を上げていると言えるでしょう。また、ハッカソンや勉強会で知り合ったユーザーの有志が集まり、「Japan SoftLayer User Group」(JSLUG)や「Bluemix User Group」(BMXUG)といったユーザー・グループが立ち上げられ、ハッカソンを通じたエコシステムが構成され、拡大しつつあります。

社内ハッカソンのススメ

先ほど、企業がハッカソンを主催する目的の一つとして「イノベーション人材の育成」を挙げました。前述のように、企業は現在、非常に厳しい競争にさらされており、継続的にイノベーションを起こす必要に迫られています。このイノベーションのカギとなるのが、CAMSS (Cloud、Analytics、Mobile、Social、

Security) と呼ばれる技術であり、これらを活用しビジネス・モデルを継続的に変革していくことが生き残りのカギと言われてています。

このような変革を遂げるためには、CAMSSと既存のビジネスを組み合わせた新しいビジネス・モデルを考案でき、かつ短期間での実現をリードできる人材、すなわちイノベーション人材が必要となります。

このイノベーション人材の育成には、社内ハッカソンが有効であり、取り入れる企業が増えてきています。組織横断的にメンバーを集め、チームを作り、自社の次世代の製品・サービスのプロトタイプ作りを目指し、短期集中型でハッカソンを行うのです。時間的な制約のため、即ビジネスにつながる成果が出ないかもしれませんが、IT部門と事業部門の社員がチームを作り、新しい技術にチャレンジし、イノベーションの種を短期間で形にする体験をする、この体験がイノベーション人材の成長へとつながるのです (図3)。

Bluemixはこのような社内ハッカソンに最適なプラットフォーム

であり、多くの企業ユーザーの皆さまから好評をいただいています。Bluemixを用いた社内ハッカソンを通じて、次世代のイノベーションの担い手が成長し、そして彼らがそれぞれの部署・役割において、仕事に変革をもたらすサービスやアプリケーションを次々と作り、企業を変革していく——Bluemixには企業の文化をイノベティブなものへと変革する力があります。社内変革ツールとしてのBluemixを用いたハッカソンに興味がある方は、ぜひお声掛けください。



日本アイ・ビー・エム株式会社
クラウド事業統括
エコシステム・ディベロップメント
Bluemix エバンジェリスト

藤田 昌也
Masaya Fujita

日本IBM入社後、社内システム (System z) の開発・保守プロジェクトのプロジェクトマネージャを歴任。IBMクラウドの可能性に強い興味を覚え、IBMクラウドのエコシステム拡大をミッションとする現部署へ異動。ハッカソンをはじめ、IBM クラウドを広める活動に従事。



図3. 社内ハッカソン